

『新選南北樂府時調青崑』の上梓と弋陽腔系諸腔の興隆

※
根ヶ山 徹

〔新選南北樂府時調青崑〕は屬於弋陽腔系諸腔本之戲曲選本。該書現存有徳山毛利家旧蔵本和台湾国家図書館蔵本の兩種版本。這兩種版本有部分不同，最顯著の差異可見於卷之二・下層。在毛利家本中収録為〈紅娘請宴〉の部分，在台湾本中却収録為〈楊妃醉酒〉。在台湾本の目錄当中標示的明明是〈紅娘請宴〉，可是在本文中収録の散齣却是不同的劇目。在毛利家本中所見の誤刻或俗字，到了台湾本当中都被修正過了。此外，在台湾本の封面上欄裏刻有「五刻」字樣。從這裏當可以推測台湾本是由毛利家本翻印、改正後の重刻本。

該書中収録以青陽腔代表的弋陽腔系諸腔，是在新安商人深厚的庇祐之下所盛行起来的，它与皖南地区的宗教儀式也有密接的關係。原来弋陽腔是一種格律不嚴格的腔調，因能產生各種不同的異文。故収録其散齣的戲曲選本，現存的就達十五種之多。〔時調青崑〕重刻的原因估計有很多種，而其主因應該是為了與其他戲曲選本有所區隔，而希望能夠獲得更多的讀者的緣故。因此其中崑山腔的劇目被換成了青陽腔特有的劇目，以期能刷新其內容，並藉由字句的修正以達成版面一新的目的。

一
明末清初にあつて戲曲の散齣を輯めた戲曲選本が数多く上梓されたことは周知のごとくである。これらの戲曲選本には、明代前半期以降、呉地方に流伝した「呉本」、「呉本」から転化した福建系脚本の「閩本」と蘇白を混入して卑俗な挿演場面を含む「蘇白演出本」、「閩本」を分岐点

とし、明代中期以降、南京に流伝した「京本」と、安徽・江西・福建など江南の広い範囲に流伝し、新たに滾調と呼ばれる五言、七言の齊言句から成る口語的韻文短句を加えた「弋陽腔系諸腔本」が存在する^①。

こうした戲曲選本の明末における刊刻は、管見の及んだ限り概ね一回に限られており、鈔写によるものを除けば、重訂や改訂が施されて版を新たにすることはなかったものごとくである。ところが、弋陽腔系諸腔の一声腔である青陽腔の散齣を輯録する『新選南北樂府時調青崑』（以下『時調青崑』と略称）に限っては、輯録される散齣が一部で異なる二種類の版本を確認することができる。

その第一は、徳山毛利家旧蔵本である。該書は封面、目錄を欠き、ほぼ全葉に互つて蛀損が甚だしい。卷之首、卷之次、卷之一、卷之二の全四巻から成り、各巻とも上、中、下の三層から成る。本文題は「新選南北樂府時調青崑 卷之〇」に作り、卷之首の本文首に「江湖黃儒卿彙選／書林四知館繙梓」と刻す。黄儒卿が如何なる人物かは詳らかではないが、四知館は後述する同系統の戲曲選本と同様に建陽の書肆のごとくに思われる。また卷之首の末葉下層には「首巻終」と刻す。行格は上層は半葉十行九字（白は小字双行）、中層は半葉八行三字、下層は半葉九行十四字（滾調は中字、白は小字双行）。単辺、無界、白口、無魚尾。尚、卷一の第二十五葉の版心下部に刻される「昇」字は、刻工の名前と思われるが詳らかにし得ない。

第二は、現在は台湾国家図書館に架蔵される北平図書館旧蔵本である。該書の封面は上欄に「五刻」と刻し、上層には図を配し、下層に「新選時尚雅調／共聰賞／四知館梓」と刻す。巻数、本文題、行格は徳山毛

※山口大学大学院東アジア研究科

利家旧蔵本に同じ。目録は上層に各巻毎に列記し、下層には図を配する。巻之首、巻之一の本文首に「江湖黄儒脚彙選／書林四知館續梓」と刻す。巻之首の末葉下層に「首巻終」、巻之一の末葉下層に「一卷終」、巻之二の末葉上層に「二巻終」と刻している。

尚、傳芸子氏によれば北京大学図書館にも馬廉氏旧蔵本で該書の残本が蔵されるものごとくであるが、現在の所在は明らかではない。⁽³⁾

以下、本稿では該書の内容、改訂の様相について紹介し、該書が輯録する青陽腔を初めとする弋陽腔系諸腔の実態、及び青陽腔盛行の要因について考察を加えるものである。

二

二種類の『時調青崑』の上層、下層に輯録される三十三種の戯曲、計五十五齣の散齣、及び中層に輯録される「土産歌」「衙門歌」「酒令」「笑話」は以下のごとくである。(徳山毛利家旧蔵本、北平図書館旧蔵本を対照し、戯曲の散齣については原作名と齣数、標目を附記する)⁽⁵⁾

徳山毛利家旧蔵本	北平図書館旧蔵本	原作脚本
<p>巻之首・上層</p> <p>「桃花遊湖」 「奔走范陽」 「商門吊孝」 「姑阻佳期」 「魚精変化」 「郭氏訴冤」</p>	<p>巻之首・上層</p> <p>「桃花遊湖」 「奔走范陽」 「商門吊孝」 「姑阻佳期」 「魚精変化」 「郭氏訴冤」 (目録題「郭氏詞冤」)</p>	<p>「桃花記」(当該箇所「佚」) 「古城記」? 「商略三元記」第16折 「玉簪記」第21齣「姑阻」 「魚籃記」第13齣「隠蔵真形」 「周羽教子尋親記」第13齣</p>

<p>巻之首・中層</p> <p>南京十三省土産歌、 南北両京天下十三省 文武官員衙門歌</p>	<p>巻之首・中層</p> <p>南京十三省土産歌、 南北両京天下十三省 文武官員衙門歌 (目録題「天下土産、并 南京文武官員衙門歌」)</p>	<p>巻之首・下層</p> <p>「長亭分別」 「描画真容」 (目録題「描尽真容」)</p>	<p>巻之首・下層</p> <p>「長亭分別」 「描画真容」 (目録題「描尽真容」)</p>
<p>巻之次・上層</p> <p>「山伯訪友」 「英台自嘆」 「玉郎追船」 「活捉三郎」 「華容积操」 「鶯鶯聽琴」 (以下四葉註損)</p>	<p>巻之次・上層</p> <p>「山伯訪友」 「英台自嘆」 「玉郎追船」 「活捉三郎」 「華容积操」 「鶯鶯聽琴」 「小尼幽思」</p>	<p>「花園晚会」</p> <p>「伯嗜思親」 (目録題「伯嗜思親」)</p> <p>「周氏拜月」 「徳武離婚」 「夫妻祭灶」 (目録題「夫妻祭灶」)</p>	<p>「花園晚会」</p> <p>「琵琶記」第5齣「南浦囑別」 「琵琶記」第29齣「乞丐尋夫」 「琵琶記」第24齣「宦邸憂思」 「金印記」第29齣「焚香保夫」 「断髮記」第9齣「奉旨離婚」 「破窯記」第12齣「夫妻祭竈」 「蕉帕記」第8齣「採真」</p>
<p>「鶯鶯聽琴」</p>	<p>「同窓記」(佚) 「同窓記」(佚) 「霞箋記」第17齣「追逐飛航」 「水滸記」第31齣「冥感」 「赤壁記」(目録題「赤壁記」?) 「北西廂記」第8齣「鶯鶯聽琴」 「救母記」?</p>		

<p>卷之次・中層</p> <p>南北兩京天下十三省 文武官員衙門歌、摘 附酒令</p>	<p>卷之次・下層</p> <p>〔百花贈劍〕 〔狀元遊街〕 〔槐陰分別〕 〔奔走樊城〕 〔韓氏自嘆〕 〔鴛鴦送別〕 〔以下四葉蛙損〕</p>	<p>卷之一・上層</p> <p>〔蛙損〕 〔踰樓夜窺〕 〔前半二葉半蛙損〕 〔王道士斬妖〕 〔擲釵佳婿〕 〔香閣寄衫〕 〔十朋祭江〕</p>
<p>卷之次・中層</p> <p>南北兩京天下十三省 文武官員衙門歌、摘 附酒令</p> <p>〔目錄題〕〔附各樣時尚〕 □□□□</p>	<p>卷之次・下層</p> <p>〔百花贈劍〕 〔狀元遊街〕 〔槐陰分別〕 〔奔走樊城〕 〔韓氏自嘆〕 〔鴛鴦送別〕 〔兄弟聯芳〕</p>	<p>卷之一・上層</p> <p>〔平章遊湖〕 〔踰樓夜窺〕 〔王道士斬妖〕 〔目錄題〕〔道士斬妖〕 〔擲釵佳婿〕 〔目錄題〕〔擲釵佳偶〕 〔香閣寄衫〕 〔十朋祭江〕</p>
<p>〔百花記〕〔佚〕 〔破窯記〕第25齣「夫婦榮諧」 〔織絹記〕〔佚〕 〔招閔記〕〔佚〕 〔袁文正還魂記〕第19齣「托夢」 〔北西廂記〕第15齣「長亭送別」 〔琴線記〕〔佚〕</p>		

<p>卷之一・中層</p> <p>附笑話</p>	<p>卷之一・下層</p> <p>〔蛙損〕 〔中秋賞月〕 〔前半二葉半蛙損〕</p>	<p>卷之二・上層</p> <p>〔三娘汲水〕 〔蘆林相會〕 〔陽關餞別〕 〔玉蓮投江〕 〔獨行千里〕 〔臨粧感嘆〕 〔蛙損〕 〔後半二葉半蛙損〕</p>
<p>卷之一・中層</p> <p>附笑話〔目錄題〕〔精選巧 好時尚江湖笑話〕</p>	<p>卷之一・下層</p> <p>〔書館相逢〕 〔中秋賞月〕</p>	<p>卷之二・上層</p> <p>〔三娘汲水〕 〔蘆林相會〕 〔陽關餞別〕 〔玉蓮投江〕 〔獨行千里〕 〔臨粧感嘆〕 〔目錄題〕〔旅店成親〕 〔祝壽新詞〕</p>
<p>〔琵琶記〕第37齣「書館悲逢」 〔琵琶記〕第28齣「中秋望月」 〔北西廂記〕第11齣「乘夜踰牆」 〔斷髮記〕第32齣「裴矩逼嫁」 〔商略三元記〕第9折 〔葵花記〕〔當該園所〕〔佚〕 〔綵樓記〕第5齣「潭府逐婿」 〔劉智遠白兔記〕第35折 〔姜詩躍鯉記〕第26折 〔金印記〕第20齣「再往魏邦」 〔荆釵記〕第28齣「玉蓮投江」 〔古城記〕第26齣「服倉」 〔琵琶記〕第9齣「臨妝感嘆」 〔綵樓記〕第6齣「投店成親」 〔長生記〕〔佚〕</p>		

<p>題闕</p> <p>卷之二・中層</p> <p>「三元捷報」 「紅娘請宴」 ×</p> <p>「慧娘鬼弁」 「磨房重会」 「日紅托夢」 「蘇英結奏」 「衣錦榮帰」 (後半七葉半蛙損)</p>	<p>題闕</p> <p>卷之二・中層</p> <p>(目録題「江湖笑話」)</p> <p>「三元捷報」 ×</p> <p>「楊妃醉酒」 (目録題「紅娘請宴」)</p> <p>「慧娘鬼弁」 「磨房重会」 「日紅托夢」 「蘇英結奏」 (目録題「蘇英結奏」)</p> <p>「衣錦榮帰」 (目録題「蘇英結奏」)</p>	<p>「商略三元記」第36折 「南西廂記」第6齣「紅娘請宴」 「百花亭」(佚)</p> <p>「紅梅記」第17齣「鬼弁」 「劉智遠白兔記」第38折 「葵花記」第26齣「孟氏托夢」 「鸚鵡記」?</p> <p>「金印記」第42齣「封贈團円」</p>
--	---	---

ここで徳山毛利家旧蔵本と北平図書館旧蔵本が如何なる関係を有するのにかについて考えておきたい。

両者の最も顕著な相違は、卷之二・下層の第四葉(裏面四行目)から第九葉(表面一行目)に見られる。徳山毛利家旧蔵本で「紅娘請宴」が輯録される箇所に、北平図書館旧蔵本では直前の「三元捷報」末尾の【下山虎】四曲目の後半の曲と白を刪去して「楊妃醉酒」が輯録されているのである。この部分は北平図書館旧蔵本に遺される目録には「紅娘請宴」と銘記されているながら、本文には異なる散齣が輯録されていることから

すれば、北平図書館旧蔵本は徳山毛利家旧蔵本の修訂版ではないかと推測される。勿論、この変更は下層のみにとどまり、上層、中層に手は加えられていない。

また、刻字についても全篇を通して完全に同一とは言いがたく、徳山毛利家旧蔵本に頻見される誤刻の大部分が北平図書館旧蔵本に至って訂正されている。例えば卷之首・下層「周氏拜月」【二犯朝天子】三曲目では「玉漏迢迢月転廊」が「玉漏迢迢月転廊」に、卷之次・下層「状元遊街」【七賢過関】の夾白では「迎接状元相府」を「迎接状元回府」に、卷之一・下層「書館観画」【泣顔回】二曲目の滾調では「緑樹陰濃夏日長」を「緑樹陰濃夏日長」に、卷之二・上層「蘆林相会」の【駐雲飛】では「好似奴天堦」を「好似奴夫堦」に改めるがごとくである。

更に、徳山毛利家旧蔵本に頻用される俗字も北平図書館旧蔵本において正字へ改訂されている。例えば卷之首・下層「長亭分別」【本序】四曲目の滾調では「那知我翠館実無情」を「那知我翠館實無情」に、卷之次・上層「山伯訪友」冒頭の白では「為何半句不言真」を「為何半句不言真」に、卷之一・上層「十朋祭江」の【取江南】後の白では「節婦」を「節婦」に、卷之二・下層「日紅托夢」【山坡羊】三曲目では「求榮、友辱喪黄粱」を「求榮、友辱喪黄粱」に作るがごとくである。

このように、散齣全般に渉る曲白の増訂や刪去は見いだせないものの、目録に記載される散齣名が実際に輯録される散齣と異なることや、刻字が改められていることからすれば、北平図書館旧蔵本は徳山毛利家旧蔵本を翻印し、改正を施した重刻本と推察される。すなわち、北平図書館旧蔵本の封面上欄に「五刻」と刻されているのは五回目の上梓を意味するものであり、徳山毛利家旧蔵本はそれ以前の版刻であることは明らかである。

三

『時調青崑』は書名自体に「青崑」と言うように、青陽腔と崑山腔の散齣が併せ録されている。青陽腔（池州腔）は明初以来の弋陽腔から発展的に生成した声腔であり、皖南の池州府青陽県に興ったもののごとくである。湯顯祖「宜黄県戲神清源師廟記」（『玉茗堂全集』・文・七）はこの間の経緯について次のように指摘する。

此の道に南北有り。南は則ち崑山の次を海塩と為す。吳浙の音なり。其の体局 静好にして、拍を以て之が節と為す。江以西は弋陽、其の節 鼓を以てす。其の調 韻すし。嘉靖に至りて弋陽の調絶へ、変じて楽平と為り、徽・青陽と為る。

「弋陽の調絶へ」とは、弋陽腔の絶響を意味するものではなく、嘉靖年間に至つて滾調などの撰取により楽平、徽州、青陽の諸腔へ変容したとの謂である。

また、王驥徳『曲律』「論腔調第十」にも次のように言う。

旧と凡そ南調を唱ふ者、皆な海塩と曰ふ。今 海塩振るはずして、崑山と曰ふ。崑山の派、太倉の魏良輔を以て祖と為す。今 蘇州よりして太倉・松江、以て浙（江）の杭（州）・嘉（興）・湖（州）に及ぶまで、声 各々小しく変ずるも、腔調 略々同じ。……数十年来、又た弋陽・義烏・青陽・徽州・楽平の諸腔の出づる有り。今は則ち石台・太平の梨園、幾ど天下に遍く、蘇州は什の二三も与に角する能はず。其の声 淫哇妖靡にして、調名を分かつたず、亦た板眼無し。又た其の間に錯はり出で、流れて両頭蚕と為る者有り、皆な鄭声の最にして、世々癩趨痴好を争ひ、靡然として之に和し、甘んじて大雅の罪人と為る。

ここに言うところよりすれば、崑山腔が僅かな人気にとどまったのに

比して、義烏、青陽、徽州、楽平、あるいは石台、太平といった声腔は、極めて広範囲に伝播し、好評を博したものとごとくである。『曲律』には「万曆庚戌（三十八年（二六一〇））、冬至後四日」なる刊記が附されることから、この記述は万曆初年以來の声腔の交替についてのものと考えられよう。こうした演劇界の情勢にあつて、最も流行したのが青陽腔であり、『時調青崑』はその選本の一である。

さて、明末に行われた戯曲選本において、『時調青崑』（略称（青））に同じく青陽腔の散齣を輯録するものには次のものが存する。（一）は略称

・古臨黄文華選輯・郝綉甫全輯『新刻京板青陽時調詞林一枝』、万曆元年（一五七三）閩建書林葉志元刻本。〔詞〕

・汝川黄文華精選『鼎鑄崑池新調楽府八能奏錦』、万曆元年（一五七三）書林愛日堂蔡正河刻本。〔八〕

・教坊掌司程万里選・後学庠生朱鼎臣集『鼎鑄徽池雅調南北官腔楽府点板曲響大明春』、万曆間閩建書林金魁刻本。〔明〕

・閩建書林熊稔寔輯『新録天下時尚南北徽池雅調』、万曆間潭水燕石居主人刻本。〔雅〕

・闕名編『新鑄南北時尚青崑合選楽府歌舞台』、明末書林鄭元美刻本。〔台〕

『詞林一枝』は「青陽時調」と題するように、主として青陽腔を輯録している。『八能奏錦』は「崑池新調」と称し、青陽腔と崑山腔を併せ録している。また『大明春』は封面を「徽池滾唱新白／新調万曲長春」、また本文題に「徽池雅調」と冠するのみならず、卷之二以降の本文題を「新鑄（鼎鑄）徽池雅調官腔海塩青陽点板万曲明春」（卷之二・三・四・六）、

あるいは「新刻徽池雅調官腔海塩点板青陽万曲明春」（巻之五）に作るこ
とから、崑山腔、青陽腔のみならず海塩腔も輯録されているもののごと
くである。『徽池雅調』は書名自体が明示するように、徽州腔と青陽腔
の合刻であろう。『樂府歌舞台』は「時尚青崑」と題しており、青陽腔
と崑山腔の合刻であり、「風・花・雪・月」の四集のうち「風集」のみ
が残存している。

また、具体的な声腔は明示しないけれども、上掲の戲曲選本に同じく
青陽腔を初めとする弋陽腔系の諸腔を取っていると考えられる戲曲選本
には次のものが存する。¹⁰⁾

- ・ 汝川黄文華選輯『新鐫精選古今樂府滾調新詞玉樹英』、万曆二十七
年（一五九九）書林余紹崖續梓本。〔玉〕
- ・ 予章劉君錫輯『新鐫梨園摘錦樂府菁華』、万曆二十八年（一六〇〇）
書林三槐堂王会雲刻本。〔菁〕
- ・ 秦淮墨客選輯『新刊分類出像陶真選粹樂府紅珊』、万曆三十年（一六
〇二）唐振吾刊、嘉慶五年（一八〇〇）積秀堂新鐫本。〔紅〕
- ・ 吉州八景居士輯『鼎刻時興滾調歌令玉谷新簧』、万曆三十八年（一六一
〇）書林劉次泉刻本。〔簧〕
- ・ 徽歛龔正我選輯『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』、万曆
三十九年（一六一一）書林敦陸堂張三懷刻本。〔摘〕
- ・ 予章饒安殷啓聖彙輯『新鐫天下時尚南北新調堯天樂』、万曆閩閩建
書林熊稔寶續梓本。〔堯〕
- ・ 安成阮祥宇編『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府万象新』、明末書林
劉齡甫刻本。〔象〕
- ・ 闕名輯『精刻彙編雜樂府新声雅調大明天下春』、明末刻本。〔春〕

・ 闕名輯『新鐫樂府清音歌林拾翠』、明末書林奎壁齋・宝聖樓・鄭元美刊、
乾隆四十四年（一七七九）覆刻本。〔歌〕

・ 冲和居士選『新鐫出像点板纏頭百練（怡春錦曲）』、崇禎閩刻本。〔怡〕

『玉樹英』、『玉谷新簧』、『摘錦奇音』、『樂府万象新』は弋陽腔系の声腔に
特有の「滾調」を含む散齣を輯録することを明示しており、とりわけ『摘
錦奇音』は「徽板」であることが明らかである。『樂府紅珊』の書名に
言う「陶真」は七言の齊言句を用いた宋元の講唱文学ではあるけれども、
ここでは「滾調」の雅名として用いられているものと思われる。『樂府
菁華』、『堯天樂』、『大明天下春』、『歌林拾翠』については曲白の一致から
同系統の選本と考えられる。『纏頭百練』は呉本系の選本ではあるが、『弋
陽雅調教集』に弋陽腔系の散齣が輯録されている。

因みに、『詞林一枝』、『八能奏錦』、『玉樹英』の輯者黄文華は古臨、汝
川（江西南昌府）、『徽池雅調』の出版者燕石居主人は潭水（江西吉州府）、
『樂府菁華』の輯者劉君錫は予章（江西南昌府）、『玉谷新簧』の輯者八景
居士は吉州（江西吉州府）、『摘錦奇音』の輯者龔正我は徽歛（徽州歙県）、『堯
天樂』の輯者殷啓聖は予章饒安（江西饒州府）、『樂府万象新』の輯者阮
祥宇は安成（江西吉安府）の籍貫を有する。また、『詞林一枝』、『八能奏錦』
、『大明春』、『徽池雅調』、『樂府歌舞台』、『玉樹英』、『樂府菁華』、『玉谷新簧』
、『摘錦奇音』、『堯天樂』、『樂府万象新』、『歌林拾翠』は閩建書林、あるいは
書林と明示することから、建陽での上梓であることは明らかである。¹¹⁾こ
うしたことは、弋陽腔系の声腔が如何に広く伝播していたかを物語って
いる。

以下、これらの戲曲選本には如何なる特徴が見られるのか、また相互
に如何なる関係を有するのかを明らかにすべく、上掲の各種戲曲選本の

曲白を対校してみた(傍点は、徳山毛利家旧蔵本『時調青崑』を基準とした異同箇所)。
『時調青崑』巻之首・上層「姑阻佳期」は、潘必正と陳嬌蓮の密会を描く『玉簪記』第21齣「姑阻」(汲古閣刻本)に相当する。次の【泣顔回】は、女貞観の女道士陳嬌蓮が約束の期に遅れた潘必正を詰つて唱う。

<p>青</p> <p>【泣顔回】「且」休説那風流、一霎時忘却網繆、 来就説来、□□就説不来、哄人怎的、要人怎的、冤家、 教我黄昏独自、直等得月転西楼、 奴家自入空門、先必待君指望、有個天長也、(地)久的日子、誰想你花心未採、 来来往往、到如今花心已採、一去不来、(滾)当初只道和你交厚、誰知 你好後便忘交、 将人便丢、那些個見你情兒厚、…… 且(陳嬌蓮) .. 風流なぞと言ふなかれ、たちまち愛情を忘れしに、 いらつしやるのならいらつしやる、いらつしやらないのならいらつしや らないと仰つて下さいまし、わたしを騙し、どうしようというの、にく い人、 黄昏どきよりうち捨てて、西楼に月が落ち懸かるまで待たせるとは、 わたしは仏門に入つてからというもの、何よりもあなたに望んでおりま したのよ、愛情の永く変わらぬ日々が続くようにと、ところがあなたは 思いを遂げぬうちは、足繁くいらつしやいましたが、思いを遂げたら、 行つてしまつたきりいらつしやらない、「そのかみは 交情深しと思ひ しに、思ひ遂げ情に負くと誰知ろう」、 わたしのことを捨ておいて、情厚しとは言はせませぬ、……</p>	<p>詞</p> <p>【泣顔回】「且」休説那風流、一霎時忘却網繆、教我黄昏独自、等得我月転西楼、 将人便丢、那些個見你情兒厚、…… (卷之一・下層「潘必正姑阻佳期」)</p>	<p>八</p> <p>【泣顔回】「且」休説那風流、一霎時忘却網繆、教我黄昏独自、等我、月転西楼、 将人便丢、那些個見你情兒厚、…… (卷之三・上層「姑阻佳期」)</p>
--	--	---

<p>尅</p> <p>【泣顔回】「且」休説那風流、一霎時忘却網繆、 来就説来、不就来説不来、哄人怎的、冤家、 教我黄昏独自、直等得月転西楼、 自入空門、洗心待君指望、有個天長地久的日子、誰想你花心未採、往 来、花心已採、一去不来、(滾)当初只道和你交厚、好誰知好後交、 将便忘人便丢、那些個見你情兒厚、…… (卷之上・下層「潘必正姑阻佳期」)</p>	<p>歌</p> <p>【泣顔回】「且」休説那風流、一霎時忘却網繆、教我黄昏独自、等得我月 転西楼、将人便丢、那些個見你情兒厚、…… (二集「姑阻佳情」)</p>	<p>怡</p> <p>【泣顔回】「且」從今後、從今後、休説那風流、一霎時忘却網繆、 你来説就来、不就来説不来、哄人怎的、要人怎的、冤家、 你来说就来、不来说就来、哄人怎的、要人怎的、冤家、 教我黄昏独自、直等得月転西楼、 你本是得意無情漢、那有真心到我身、当初指望交情好、誰知好後便忘交、 将人便丢、那些個見你情兒厚、…… (弋陽雅調數集「阻約」)</p>
--	---	---

『詞林一枝』、『八能奏錦』、『歌林拾翠』はいずれも汲古閣刻本と同一であり、崑山腔の散齣が輯録されている。『堯天楽』には『時調青崑』とほぼ同一の滾調が、『纏頭百練』においては【泣顔回】冒頭に「從今後、從今後」(今よりは後、今よりは後)なる二句を加え、六句目と七句目の間に「你本是得意無情漢、那有真心到我身、当初指望交情好、誰知好後便忘交」(意を得て心変はりをし、我が身に真心伝はらず、そのかみは 交情深しと思ひしに、思ひ遂げ情に負くと誰知ろう) という『時調青崑』とは内容の異なる滾調が加えられている。

『時調青崑』巻之首・下層「分別」は、応試に立出する蔡邕と新婚の妻趙五娘との別れを叙する『琵琶記』第5齣「南浦囑別」(汲古閣刻本)

に相当する。次に掲げる【犯尾引】は、蔡邕が趙五娘との別離の情を綿々と唱いあげる曲である。

<p>青</p> <p>【犯尾引】……(生) 使我腸已斷、欲離未忍、泪難收、無言自零、</p> <p>【旦】 正是、弓動難留弦上箭、糸牢怎繫順風舟、你那里去則去、終須去、我這里留則留、寔難留、</p> <p>……</p> <p>生(蔡邕) ……悲しさに腸はちぎれんばかり、旅立たんとするも未だ忍びず、泪はとどめ難く、言葉もなく自づと落つ、</p> <p>旦(趙五娘) ……これこそ「弓動かば弦上の箭を留め難し、糸牢くとも怎で順風の舟を繫がんや」と言ふもの、あなたは行くといつたら行くので、結局は行つてしまはれます、わたしは残ることは残りますが、本当にひとり残るに忍びない、……</p>	<p>明</p> <p>【尾犯】……(生) 腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【旦】 弓動不留絃上箭、糸牢難繫順風舟、你那裡去則去、終須去、我這裡留則留、寔難留、……</p> <p>(卷之四下層「蔡伯喈長亭分別」)</p>	<p>玉</p> <p>【尾犯】……(生) 腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【旦】 弓動不留絃上箭、糸牢難繫順風舟、你那裡去則去、終須去、我這裡留則留、寔難留、……</p> <p>(卷之一下層「伯喈長亭分別」)</p>	<p>菁</p> <p>【尾犯】……(生) 腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【旦】 □□□□則去、終須去、我這裡留則留、寔難留、……</p> <p>(卷之一下層「伯喈長亭分別」)</p>	<p>簧</p> <p>【尾犯】……(生) 腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【旦】 解元、正是、機動難留弦上箭、糸牢怎繫順風舟、你那裡去則去、不忍去、我這裡留則留、寔難留、……</p> <p>(首卷下層「五娘長亭送別」)</p>
--	--	---	---	--

<p>摘</p> <p>【尾犯引】……(生) 腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【旦】 你看、我丈夫行色匆匆、好似甚的而來、【滾】 就似、弓動不留絃上箭、糸牢難繫順風舟、你那里去則去、終須去、我這里留則留、怎生留、……</p> <p>(卷之一下層「五娘長亭送別」)</p>	<p>歌</p> <p>【尾犯序】……(生) 腸已斷、欲離未忍、泪難收、無言自淋、……</p> <p>(初集「南浦囑別」)</p>	<p>怡</p> <p>【本序】……(生) 你看他那裡腸已斷、欲離未忍、淚難收、無言自零、</p> <p>【生旦】 正是、弓發不留絃上箭、糸牢難繫去人舟、去則是終須去、留則是也難留、……</p> <p>(弋陽雅調數集「分別」)</p>
---	---	---

『大明春』『玉樹英』『樂府菁華』『玉谷新簧』『纏頭百練』は『時調青崑』にほぼ同一であるけれども、『摘錦奇音』の滾調は「你看、我丈夫行色匆匆、好似甚的而來」(なんとまあ、我が夫の旅立ちには慌たたく、何に似ているかと言へば)に、『纏頭百練』の滾調後半は「去則是終須去、留則是也難留」(行くといつたらやはり行く、それでも残るに忍びない)に作る。『歌林拾翠』は崑山腔を輯録しており、汲古閣刻本に同様である。

『時調青崑』巻之首・下層「描画真容」は『琵琶記』第29齣「乞丐尋夫」(汲古閣刻本)に相当し、飢饉で義父母を亡くした趙五娘が乞食しながら消息の知れぬ夫蔡邕を尋ねて都に旅立つ場面である。次に掲げる【新水令】は、亡き義父母の真容を描こうと思いつながらも適わぬ趙五娘の悲しみを切々と唱った曲であるけれども、汲古閣刻本と対校すると、青陽腔を初めとする弋陽腔系諸腔では曲牌のみならず、曲辞、白ともに大きく隔たっており、滾調も加えられている。

明	詞	青
<p>【新水令】想真容、未写泪先流、要相逢、又不能勾、泪眼描来易、愁容画出難、全憑着這枝筆、描不成、画不就、万般愁、親喪荒丘、要相逢、除非是魂夢中、公婆、你孩兒、自從去後、不曾得半載歡悅、中兒有、公婆、你孩兒、自從去後、不曾得半載歡悅、(卷之四上層「五娘描真」)</p>	<p>【新水令】想真容、未写泪先流、要相逢、又不能勾、泪眼描来易、愁容写出難、全憑着這枝筆、描不成、画不就、万般愁、親喪荒丘、要相逢、除非是魂夢中有、公婆、你自從孩兒去後、不曾得半載歡悅、(卷之三下層「趙五娘描画真容」)</p>	<p>【新水令】想真容、提筆未写泪先流、要相逢、不能得勾、泪眼描来易、愁容写出難、全憑着這管筆、描不成、画不就、万般愁、伯嗜的夫、自你去後、陳留連遇飢荒三載、你那爹娘双双饑死了、那知道你親喪在荒丘、「又」、要相逢、則除非是魂夢中有、公婆、自奴家来做媳婦、不曾得半載歡悅、真容を想ひ起こし、筆を執るも描かぬうちに泪流る、逢はんとすれども適はじ、泪眼を描くは容易きも、愁容を写すは難し、この筆を頼みとすれど写し得ず、輪郭もなぞれず、愁ひは万般、旦那様、あなたがお出かけになつた後、陳留は三年も続けて飢饉に遇い、お父様もお母様も飢え死になさいました、いかで知らんや、あなたの親御の亡くなりて奥津城に在りしを、親御の亡くなりて奥津城に在りしを、逢はんとすれど、夢の中に思ひ描く他は無し、お母様、わたしが嫁に来てからというもの、半年の楽しみもございませんでした、</p>

歌	堯	紅	玉
<p>【新水令】(旦)想真容、未写泪先流、要相逢、不能勾、正是、泪眼描来易、愁容写出難、全憑着這管筆、描不成、画不就、万般愁、伯皆夫、自你去後、陳留連遇飢荒三載、你爹娘双双饑死、那知道你、親喪荒丘、要相逢、則除是魂夢中有、公婆、自奴家来做媳婦時、不曾得半載歡悅、(初集「描画真容」)</p>	<p>【新水令】(旦)想真容、提筆未写泪先流、要相逢、不能勾、泪眼描来易、愁容写出難、全憑着這管筆、描不成、画不就、万般愁、伯皆夫、自你去後、陳留連遇飢荒三載、你那爹娘双双饑死、那知道、親喪在荒丘、要相逢、則除是魂夢中有、公婆、自奴家来做媳婦時、不曾得半載歡悅、(卷之上下層「趙五娘描画真容」)</p>	<p>【新水令】(旦)想真容、未写泪先流、要相逢、不能得勾、泪眼描来易、愁腸写出難、全憑着這枝筆、写不出、万般愁、親喪荒丘、要相逢、余(除)非魂夢中有、奴家自婦蔡門、我公婆、那會得半載歡悅、(卷十四・忠孝節義類「趙五娘描画真容」)</p>	<p>【新水令】想真容、未写泪先流、要相逢、又不能勾、泪眼描来易、愁容写出難、全憑着這枝筆、描不成、画不就、万般愁、親喪荒丘、要相逢、除非是魂夢中有、公婆、你孩兒、自從去後、不曾得半載歡悅、(卷之一下層「五娘描画真容」)</p>

『堯天樂』『歌林拾翠』は、『時調青崑』にほぼ同様であるけれども、同じく青陽腔を輯録する『詞林一枝』『大明春』と『玉樹英』『樂府紅珊』は四句目と五句目の間の夾白が無く、別の一群と見なし得る。

『時調青崑』巻之次・下層「状元遊街」は「呂蒙正風雪破窯記」第25齣「夫婦榮諧」（書林陳含初・詹林我刻本）に相当する。次の【七賢過関】は破窯に身を置く呂蒙正が状元に及第した喜びを唱う。

青	雅	象
<p>【七賢過関】「生」瓊林赴宴婦、喜沐君恩、龍光映緑袍新、醉庄貂鞍上、 「丑」稟状元爺、前面相府搭彩鋪毡、迎接状元相（回）府、「生」起去、 我想昔日也是蒙正、今日以是蒙正、衣衫雖換、骨格猶存、岳丈呵、 你道是相門高聳、又誰知仕路又降、這還是昔日書生、今來拜岳翁、 生（呂蒙正）瓊林的宴より帰り、君恩を蒙るを喜ぶ、龍光は緑袍の新たなるに映へ、酔ひて貂鞍の上に臥す、 丑（小者）状元様に申し上げます、前方なるお屋敷には飾り棚を組み、毛氈を敷き詰めて、状元様のお帰りを迎えしております、 生・出立しよう、想うに以前も蒙正じゃが、今日も蒙正じゃ、衣裳を取り換えても、中身はそのまま、父上、 屋敷の門は高く聳ゆと仰せらるるも、役目を終へて家に帰らば、昔日の書生たること変はりなし、これより父上を拜さん</p>	<p>【駐馬聽】「生」瓊林赴宴婦、喜沐君恩、龍光映緑袍新、翠庄凋鞍重、当日、 黄卷青灯、到今日搏換得玉堂金馬春風、始信道書中車馬多如簇、真個是人似神仙馬如竜、 （巻二上層「蒙正榮婦」）</p>	<p>【七賢過関】「生」瓊林赴宴婦、喜沐君恩、龍光映緑袍新、醉庄金鞍重、 万巻詩書勸裡読、千鍾粟向苦中求、憶初時呵、 当日黄卷青灯、夜雨搏換得玉堂金馬春風、 破窯荒徑一孤窮、忍耐寒窓苦下工、黄卷青灯勤苦読、金章紫授一朝栄、 親口徳頭帝恩隆、不比前番噓睡翁、 始信道書中車馬多如簇、真個是人似神仙馬似竜、 （前集・巻之一・下層「蒙正遊街自嘆」）</p>

『徹池雅調』の曲牌は【駐馬聽】に作り、曲辞の前半は書林陳含初・詹林我刻本に殆ど同様で五句目以降を「当日黄卷青灯、到今日搏換得玉堂金馬春風、始信道書中車馬多如簇、真個是人似神仙馬如竜」（かつての受験勉強のおかげで、今日 栄達して得意満面、道書に都の車馬はむらがるが如く多いとあったが、まことに人は神仙に似 馬は竜の如し）としている。『楽府万象新』は曲辞・曲牌は原作脚本に同様であるけれども、四句目の後を「万巻詩書勸裡読、千鍾粟向苦中求、憶初時呵」（万巻の詩書 まさに読み、千鍾の粟 苦中に求む、昔を憶へば）に作り、「勸裡」なる呉語を含んでいる。六句目の後にも「破窯荒徑一孤窮、忍耐寒窓苦下工、黄卷青灯勤苦読、金章紫授一朝栄、親口徳頭帝恩隆、不比前番噓睡翁」（破窯荒徑 一に孤窮す、寒窓に耐へ 拙きに苦しむ、黄卷青灯 勤苦して読み、金章紫授 一朝にして栄なり、親口「欠字？」の徳頭はれて帝恩隆し、以前の噓睡翁に比ぶるもなし）なる句を加えている。

『時調青崑』巻之二・下層「三元捷報」は、商輅の発跡変泰を描く『商輅三元記』第36折（富春堂刻本）に相当する。次に掲げる【下山虎】は、商輅が三たび続けて合格したことを祝って母親の秦雪梅が唱う。

青
<p>【下山虎】到今日守得闔門似水、「又」、心底如水、 崑山乃産美玉之所、比如無瑕玷者、不用琢磨、価値連城、古云、磨而不磷、不曰堅乎、我秦氏守節、非是自誇了、 比美玉無瑕翳、磨而不磷、…… 今日まで闔門を守ること水の似く、闔門を守ること水の似く、心は水の如し、 崑山は美玉を産する所、たとえば疵が無く、磨く必要が無ければ、連城壁にも値する。古より「磨すれども磷がざれば、堅しと曰はざらんや」</p>

<p>青 と申すことにございます。わたくし秦氏が節を守ってきたことを、決して自慢するわけではありませんが、たとえば美玉に瑕翳無く、磨すれども磷がざれば、……</p>	<p>春 【下山虎】「且」閨門似水、 妾有匣中鏡、一破不復円、妾有琴上絃、一断不復纏、惟存古氷雪、与妾作心肝、死者倘復生、剖与良人看、 心裏如水、比美玉無瑕疵、磨而不磷、…… (卷之七上層「三元捷報」)</p>	<p>歌 【下山虎】「且」閨門似水、 妾有匣中鏡、一破不復円、妾有琴上絃、一断不復纏、惟存古氷雪、為妾作心肝、死者倘復生、剖与良人看、 心裏如水、 天下之物、至潔者莫如玉、至堅者亦莫如玉、 比美玉無瑕翳、磨而不磷、…… (二集「三元捷報」)</p>
--	---	--

『天下大明春』には第一句目の後に「妾有匣中鏡、一破不復円、妾有琴上絃、一断不復纏、惟存古氷雪、与妾作心肝、死者倘復生、剖与良人看」(妾に匣中の鏡有り、一たび壊れて復た円ならず、妾に琴上の絃有り、一たび断ちぎれて復た纏ねざる、惟だ古より貞節を守りしは、妾にとりて情人なるがため、死者もし復た生くれれば、剖かちて良人に看せん)なる『時調青崑』とは異なる五言斉言の滾調が加えられている。『歌林拾翠』では更に「天下之物、至潔者莫如玉、至堅者亦莫如玉」(天下の物、極めて潔きも玉には及ばず、極めて堅きも亦た玉には及ばず)という二句も加えられている。富春堂刻本にこれらは無い。

『時調青崑』巻之首・下層「徳武離婚」は李徳武と裴淑英の悲歎離合を描く『断髮記』第9齣「奉旨離婚」(世徳堂刻本)に相当する。次の【紅

衲襖】は、罪に連座したがために妻淑英の父親に離縁を迫られて、悲嘆に暮れる李徳武が唱う。

<p>青 【紅衲襖】「生」為甚事倚鸞幃意似顛、為甚的泣鮫綃眉不展、 妻、你雖不言、我也曉得了、 你望関山応只念辺塞遠、 (滾) 倚欄長嘆無言語、愁鎖眉頭我尽知、 望関山応只念辺塞遠、…… 生(李徳武) ..なにゆゑに鸞幃に倚りそひて 意鬱がるが似く、なにゆゑに鮫綃に泣きふして 眉展びざる、 妻よ、そなたは物言わぬけれども、それがしとてもわかつておる、 関山を望み見て 辺塞の遠きを思へ、 欄に倚り添ひ 長嘆して言葉も無く、愁ひに閉ざされし眉頭 我 尽く知れり、 関山を望み見て 辺塞の遠きを思へ、……</p>	<p>台 【紅衲襖】「生」為甚事倚鸞幃意似顛、為甚的泣鮫綃眉不展、 妻、你雖不言、我也曉得了、 莫不是望関山応只念辺塞遠、 倚欄長嘆無言語、愁鎖眉尖我尽知、 望関山応只念辺塞遠、…… (風集「徳武離婚」)</p>
---	--

『楽府歌舞台』では曲辞の三句目を「莫不是望関山応只念辺塞遠」(よもや関山を望み見て 辺塞の遠きを思はぬではあるまい)に作るけれども、『時調青崑』と基本的に相違は無い。因みに、世徳堂刻本には「倚欄長嘆無言語、愁鎖眉頭我尽知」なる滾調は含まれない。

以上のように、同じく青陽腔の選本であると表示しながらも崑山腔を輯録したり、『時調青崑』と内容を異にしたり、あるいは滾調、もしくは

は弋陽腔とのみ表示する選本が『時調青崑』と同じ内容であったりするのは何ゆえであろうか。

先ずは、それぞれの戯曲選本の出版の時期が異なることに関連するであろう。戯曲選本のなかでも最も古いものは万暦元年の上梓であり、以後、明末に至るまでの間、同一声腔内で変容を遂げたものと考えられる。これは、前掲の王驥徳『曲律』に「調名を分かつたず、亦た板眼無し」と言うところからすると、弋陽腔系の諸腔は極めて可変的な声腔として行われていたため、曲辞や白、滾調の固定化に困難を伴ったためと思われる。

また、崑山腔が嘉靖末年に生み出されたのに比して、既述のとおり弋陽腔はより古い歴史を有する。実際に皖南地域に崑山腔が流入するのは遅くとも万暦の後半期に至つてのことであるけれども、弋陽腔系諸腔の戯曲選本においても、万暦初年以降、この江南の新声を積極的に撰取したため、青陽腔と崑山腔とが融合して新たな分化を遂げたものと、未分化のものとの併録が見られるのではないか。

ともあれ、例示した以外の散齣においても概ね同様の結果を得ることができることからすれば、弋陽腔系諸腔の流伝は極めて複雑な様相を呈していたと言ふことができよう。

四

最後に、旧来の形から変容した弋陽腔系諸腔が、徽州や池州といった皖南地域において盛行し、広く流伝した要因について考えておきたい。

青陽なる地名が声腔名に冠せられたのは、当地における商品経済の発達、とりわけ皖南地域一帯が新安商人の故地であったことと決して無関係ではない。謝肇淛『五雜俎』巻四「地部二」には、新安商人が山西商

人と併ぶ二大勢力であったことを述べている。

富室の雄を称へし者、江南は則ち新安を推し、江北は則ち山右なり。

新安の大賈は、魚塩を業と為し、鎡を蔵すること百万に至る者有り。

其の他の二三十万は、則ち中賈のみ。……

塩商を初めとする各種の業種に従事していた彼らは、販路を中国全土に拡大していた。張瀚『松窓夢語』（万暦二十一年（一五九三）序刊）巻之四「商賈紀」には言う。

安（慶）・太（平）より宣（城）・徽（州）に至るまで、其の民多く機利を仰ぎ、本を捨てて末を逐ふ、唱擢輻輳し、以て帝王の都する

所に遊び、而も其の奇贏を握る休（寧）・歙（県）尤も夥しく、故に賈人 幾ど天下に遍し。

なかでも青陽腔が生み出された青陽県は交通の要衝であり、徽州から池州に至る際の經由地であった。『青陽県志』¹⁶（万暦三十二年（一五九四））巻之六・上「原芸篇」の「記銘類」に引用される田登年（蜀人、知本県）『新城記』には次のような記述がある。

壤地は褊小にして、式廓は増すこと弗く、雄を諸邑に称へるを得ず。而るに東のかた呉会に連なり、南のかた宣（城）・歙（県）を控へ、西のかた荊（州）・饒（州）に通じ、北のかた大江を枕み、舟車の至る所の者 天下を半ばす。識者以為へらく、池州の要地なり、と。

こうした情勢にあつて、青陽の商人は俳優を庇護し、演劇の興隆に寄与したものとよくである。前掲『青陽県志』巻之五「原治篇」の「風俗」の条には言う。

古は淳朴を尚ぶも、今は巧偽に驚せ、上富下貧、侈靡競生、財用迫りて舒やかならず。……第だ其れ利を嗜み勝を好むのみにして、骨肉と雖も相ひ讐敵するを免れず。浮末に趣りて、優俳を鼓掌し、四

に出でて賞賈し、廉恥の風 微かなり。

以上のように、青陽県は新安商人にとって地理的に重要な位置を占めていただけではなく、彼らは演劇にも深い関心を示したが故に、青陽腔が盛んに行われ、しかも広く流伝し得たのである。

更に、青陽腔の散齣を輯録する戯曲選本の出版も新安商人と深く関わっていたものごとくである。このことは、『時調青崑』巻之首・中層に当時の商業書よろしく「兩京十三省土産歌」が配され、各地の特産品を列記していることから窺測することができよう。『八能奏錦』巻之一・中層に「六院彙選江湖方語」「江湖俗語」、巻之六・中層に「江湖方語」を、摘錦奇音」巻之四・上層、巻之五・上層に「大明一統合屬兩京十三省所轄」を、『樂府万象新』前集・四卷・中層に「彙纂京省府州県名考実」を、『大明天下春』巻之五・中層に「新纂兩京各省府州県名」、巻之八・中層に「江湖方語」「通方俗語」を配することも、やはり弋陽腔系の戯曲選本が商人の活動と密接な関係を有していたことを物語っている。

また、同系統の戯曲選本の輯者には江西の出身者が多いこと、概ね建陽において上梓されたことは先述のごとくであるけれども、青陽腔を初めとする弋陽腔系諸腔が旧来の弋陽腔が行われていた地域を含む、極めて広い範囲に伝播していたことが明らかである。

これとは別に、民間における宗教活動との関連を指摘することができ。青陽県治にあつた九華山は地蔵・目連信仰の中心地であり、宗教的祭祀と演劇とは不可分の関係にあつたのである。前掲『青陽県志』巻之六・下「時政条議」に引用される知県蔡立身の「九華山供応議」には言う。

八月初一至り、仏誕の大会あり、動もすれば数万人に至る、鑼を鳴らし仏を喊び、声は天地を震はし、之をして格す能はざらしむ。其の僧人 各々茶酒を携へて山を下り、中途 其の舎に至らんこと

を迎へんと要するや、張筵唱戲して以て待し、甚だしくは主顧を争ひて相殺殺する者有るに至る。香客は或いは南のかた浙江・徽郡よりし、北のかた山陝より遠来す、其の施捨は数十金を動かし、少なくとも二三両を下らず。

目連信仰の中心地であつたことは、目連戲にも深く関わってきたものごとくである。張岱『陶庵夢憶』巻六「目蓮戲」の条には、徽州・青陽の俳優に目連戲を上演させたという記事が遺されている。

余が蘊叔 演武場に一大台を搭け、徽州・旌(青)陽の戲子の、剽軽精神にして、能く相撲・跌打する者三四十人を選び、『目連』を搬演せしむること、凡そ三日三夜なり。……

また、皖南地域における儺戲の流行も看過できない。『徽州府志』(嘉靖四十五年〔一五七三〕)巻之二「風俗志」の条によれば、祭祀演劇として儺戲が上演されていたことが明らかである。

二月二十八日、歙・休(寧)の民、汪越国の像を輿ぎて遊ぶ。誕日を以て上寿を為すと云ふ。俳優、狄鞮・胡舞・仮面の戲を設く。飛織の垂髻、偏諸の革鞞なり。儀衛前導し、旂旄 行を成す。郷井を震はせ、以て奇雋と為す。

青陽県の属する池州府は、まさしく池州儺戲の本場であり、弋陽腔系諸腔に散見される滾調が、儺戲など民間の祭祀演劇に見られる詩讚形式の影響を受けて生成されたことは夙に指摘されるとおりである。

ともあれ、『時調青崑』を初めとする弋陽腔系諸腔は、新安商人の篤い庇護をうけて発展し、同時に皖南地域の宗教儀礼とも密接に関わっていた。そもそも弋陽腔が格律の極めて緩やかな声腔であつたことから、バリアントが数多く生み出され、その散齣を輯録する戯曲選本は、現存する限りにおいて十五種類にも及ぶ。何ゆえに『時調青崑』が「五刻」

にまで及んだのかは必ずしも詳らかではないけれども、同じ弋陽腔系諸腔の散齣を輯録する他の選本と一線を画し、多くの読者を獲得すべく、崑山腔の劇目『南西廂記』『紅娘請宴』を書陽腔特有の劇目「貴妃醉酒」²⁰に差し替えて内容の刷新を図り、字句の訂正によって版面を一新したのではないか。

注

- (1) 田仲一成氏『中国祭祀演劇研究』第三章「祭祀演劇における戯曲脚本の階層分化」(東京大学出版会、一九八二)三九八頁〜四〇三頁に示される見解に私見を加え、このように分類しておく。
- (2) 上村幸次氏蔵。
- (3) 「善本戯曲叢刊」第一輯(台湾学生書局、一九八四)にも景印される。尚、趙万里氏編『国立北平図書館善本書目』(一九三三)「集部・南北曲類・選集之属」には「新選南北楽府時調青崑四卷、明黄儒卿輯、明刻本」と著録される。孫楷第氏『戯曲小説書録解題』(人民文学出版社、一九九〇)に著録される該書も恐らく同一のものと思われる。
- (4) 「釈浪調——明代南戲腔調新考——」(白川集)、文求堂、一九四三。原載『東方学報』京都、第十二册第四分册、一九四二—四五頁。尚、北京大学図書館古籍善本室に備えられる馬氏特蔵本の書名カードはもとより、古籍整理研究室編『北京大学図書館蔵古典戯曲目録』(一九九二)にも著録されない。
- (5) 『桃花記』は中国国家図書館善本特蔵部蔵鄭振鐸旧蔵、『新鐫徽本图像音釈崔探花台榭桃花記』、『古城記』は「古本戯曲叢刊・初集」景印「明末刻本」、『商輅三元記』は同「富春堂刻本」、『魚籃記』は同二集景印「文林閣刻本」、周

羽教子尋親記』は同初集景印「富春堂刻本」、『断髮記』は「中国戯曲善本三種」(思文閣出版、一九八二)景印「世徳堂刻本」、『破窯記』は「古本戯曲叢刊・初集」景印「書林陳含初・詹林我刻本」、『袁文正還魂記』は同二集景印「文林閣刻本」、『紅梅記』は同初集景印「明末刻本」、『葵花記』は中国国家図書館善本特蔵部蔵「二刻京本出像音釈高彦真青葵花記」、『綵樓記』は「古本戯曲叢刊・二集」景印「旧鈔本」、『劉智遠白兔記』は同初集景印「富春堂刻本」、『姜詩躍鯉記』は同「富春堂刻本」、『鸚鵡記』は同「富春堂刻本」を用い、他は全て汲古閣刻「六十種曲」本を用いた。

- (6) 中国国家図書館蔵本は、下巻第十八齣から第三十五齣までのみが現存する。
- (7) 中国国家図書館蔵本は、前半二齣、及び第三十一齣以降を欠く。
- (8) 前掲注(4) 傅芸子氏は湯頭祖の記述に基づき弋陽腔が皖南に流入し、変調したのが青陽腔であると言い、葉徳均氏『明代南戲五大腔調及其支流』(『戯曲小説叢考』、中華書局、一九七九)は大平腔の影響を受けた弋陽腔、及び浪調の唱法を継承して完成されたのが青陽腔であると言い、銭南揚氏『戯文概論』「源委第二」第四章「三大声腔的变化」第三節「余姚腔到青陽腔」(上海古籍出版社、一九八一)には青陽腔は余姚腔の浪調を継承したものであると言う。
- (9) 本稿では「詞林一枝」「八能奏錦」「大明春」「徹池雅調」は前掲注(3)「善本戯曲叢刊」第一輯、「楽府歌舞台」は同第四輯(同、一九八七)所収の景印本によった。
- (10) 本稿では「楽府善華」「玉谷新簧」「摘錦奇音」「堯天楽」は前掲注(3)「善本戯曲叢刊」第一輯、「纏頭百練」「楽府紅珊」「歌林拾翠」は同第二輯(同上)、「玉樹英」「楽府万象新」「大明天下春」は李福清(B. R. Lin)・李平両氏編『海外孤本晚明戯劇選集三種』(上海古籍出版社、一九九三)所収の景

印本によった。鄭元美は『楽府歌舞台』、『歌林拾翠』の刊行に携わっており、奎壁斎は葉德輝『書林清話』巻五「明人私刻坊刻書」に「金陵奎壁斎、崇禎六年（一六三三）刻『彙刻忠經孝經小学』十巻」と著録されており、『歌林拾翠』の刊行も明末と認められる。

(11) 張秀民氏『明代印書最多的建寧書坊』（張秀民印刷史論文集）、印刷工業出版社、一九八八）に「明代建陽書坊均自称『書林』」と言う。

(12) 潘之恒『亘史』雜篇卷之四「文部」には「曲之擅于吳、莫与競矣。然而盛于今、僅五十年耳。……自黃問琴以下諸人、十年以來、新安好事家多習之」と言う。潘之恒は徽州府歙県の人であり、『亘史』は彼の死後四年、天啓六年（一六二六）に上梓されている。

(13) 張庚・郭漢城両氏主編『中国戯曲通史』第三編「崑山腔与弋陽諸腔戲」第四章「崑山腔与弋陽諸腔戲的舞臺藝術」第五節「弋陽諸腔的音楽」二「滾調的出現」（中国戯劇出版社、一九八二）三七二頁〜三七九頁には、滾調の挿演による崑山腔と弋陽腔系諸腔の併存の実態を例示する。また小松謙氏「詩讀系演劇考」（『中国古典演劇研究』、汲古書院、二〇〇一。原載「富山大学教養部紀要」第二十二巻一号、一九八九）は、民間祭祀演劇に見られる詩讀形式の影響を指摘し、金文京氏「詩讀系文学試論」（『中国——社会と文化』第七号、一九九二）には、楽曲系と詩讀系との融合についての言及がある。

(14) 前掲注(一)田仲一成氏『中国祭祀演劇研究』第二篇「祭祀演劇の展開」第三章「祭祀演劇における戯曲脚本の階層分化」四三八頁〜四六五頁においては、繁適碩人増改定本『詞壇清玩琵琶記』、『詞壇清玩北西廂記』の眉欄校語に基づいて、『詞林一枝』、『八能奏錦』、『楽府菁華』、『玉谷新簧』、『摘錦奇音』、『大明春』は「徽本」に、『徽池雅調』、『時調青崑』、『楽府紅珊』、『堯天楽』は「弋陽腔本」に分類する。田仲氏の分類はもとより声腔のみに基づくも

のではないけれども、「徽本」「弋陽腔本」の分類が『琵琶記』や『西廂記』以外の戯曲では必ずしも該当しない場合があるため、ここでは弋陽腔系諸腔として一括して取り扱うものとする。

(15) 新安商人との関わりについては、前掲注(一)田仲一成氏『中国祭祀演劇研究』第三篇「祭祀演劇の伝播」序論「祭祀演劇伝播の原理」五一〇頁〜五二六頁、同氏「十五・十六世紀を中心とする江南地方劇の変質について(六)」（『東洋文化研究所紀要』第百二冊、一九八七）二二六頁〜二五五頁に詳しい。

(16) 東洋文庫蔵用米国会図書館旧北平図書館蔵本景照本。尚、当時の商業書の類を検しても、徽州から青陽県、池州を結ぶ商業経路が存在したことが明らかである。例えば、壮遊子撰・会稽商濬校『水陸路程』（万曆四十五年（一六一七）序刊、尊経閣文庫蔵）巻八「江南水陸」の第十六条及び閩郡李晋徳（上層）・新安約山黄汴（下層）撰『新刻合併客商一覽醒迷天下水陸路程』（崇禎八年（一六三五）序刊、山口大学附属図書館棲息堂文庫蔵）巻八・下層に「南京由江南至安慶府路」が記載され、程春宇撰『新安原板土商類要』（天啓六年（一六二六）序刊、尊経閣文庫蔵）巻一の第六条、及び新安天都憺漪子撰『新鑄土商要覽』（清初刊、国立公文書館内閣文庫蔵）巻一の第六条に「徽州府由青陽縣至池州府路程」が記載されるごとくである。

(17) 魏良輔『南詞引正』（周貽白氏輯釈『戯曲演唱論著輯釈』、中国戯劇出版社、一九六二）第五条には「腔有数様、紛紜不類。……各方風氣所限、有崑山・海塩・余姚・杭州・弋陽。自徽州・江西・福建、俱作弋陽腔」とあり、江西・福建は旧来の弋陽腔が行われていた地域である。尚、前掲注(一)田仲一成氏『中国祭祀演劇研究』第三篇「祭祀演劇の伝播」序論「祭祀演劇伝播の原理」五二〇頁〜五二四頁には閩語の混入も指摘する。

(18) 「北京図書館古籍珍本叢刊」29(書目文獻出版社、一九八七)景照本。尚、同類の記事は『歙縣志』(康熙二十九年(一六九〇))卷之二「風俗」の条にも「正月三日間、迎神賽会、輿土神及悉達多太子以遊。設俳、優、狄、鞦、韆、舞、仮面之戲。飛織、垂、髻、偏、諸、車、鞞。儀、衛、前、導、旂、旄、成、行。震、於、鄉、井、以、為、奇、雋、而西郷会尤盛」と見える。

(19) 前掲注(13)小松謙氏「詩讀系演劇考」、金文京氏「詩讀系文学試論」のいずれにも、「成化本説唱詞話」の「ごとき詩讀系講唱文学が貴池の儼戲と
いつた演劇へ転化したことを指摘する。

(20) 安徽省芸術研究所・安慶市黄梅戲研究所・池州地区文化局・青陽県文化局合編『青陽腔劇目匯編』(一九九二)五〇六頁〜五〇八頁に輯録される「楊妃醉酒」の識語には、「楊妃醉酒」乃嶽西高腔中之單齣。最早載于『時調青崑』、可能是來自崑腔、從開始【新水令】、收場【清江引】來看、早在明代万曆之前、即為青陽腔改調歌之」とある。